

## 笠置山勝一の「戦後」と大相撲

—文筆活動を中心に—

### Kasagiyama Katsuichi's "Postwar" and Ozumo: Focusing on Kasagiyama's Writings

胎中 千鶴

Chiduru TAINAKA

*Keywords : Kasagiyama Katsuichi, Ozumo*

キーワード：笠置山勝一 大相撲

#### はじめに

笠置山勝一（かさぎやま・かついち・1911～1971年、本名・仲村勘治）は、1930～40年代に大相撲で活躍した力士である。当時としては非常に珍しい大卒の「インテリ力士」で、最高位は関脇。身長173センチと小兵ながら、理詰め徹した四つ相撲で人気を集めた。出羽海部屋の「智将」「知恵袋」とも呼ばれ、同門の安藝ノ海が横綱双葉山の連勝を止めた際はその「参謀」として一躍名を知られるようになった。

文才に恵まれたため、現役時代から講演や執筆活動を精力的におこない、相撲評論やエッセイ、小説、相撲指導書など多くの著作を残している。1945年に現役を引退し年寄秀ノ山を襲名、財団法人日本相撲協会理事として多忙な業務に追われる傍ら、評論やエッセイ、指導書など、戦前と同様に活発な文筆活動を継続した<sup>1)</sup>。

笠置山勝一の戦時期の文筆活動については、赤澤史朗が相撲史の文脈のなかに位置づけて詳細に検証した<sup>2)</sup>。また筆者も「国技」や「興行」という視点から、1930～40年代の笠置山の大相撲に関する言説について整理した<sup>3)</sup>。しかし、戦後の秀ノ山勝一の言論活動に関する先行研究はこれまでほとんどなく、未整理の状態である。

笠置山は現役力士あるいは協会構成員の立場で1930年代からおよそ40年間にわたって大相撲の状況を詳細に記録し、決まり手の整理など競技面の近代化に貢献した。また、土俵上の問題にとどまらず、開催場所や観客の視点、協会運営上の改革・改善、相撲の競技人口増加への施策など、広範な分野で大相撲を客観的にとらえ、それらを文章化した。協会関係者でありながら相撲界の諸状況をここまで言語化できた人物は、彼をおいて他にはいない。

そのため彼が残した著作物は相撲史研究にとって貴重な資料であり、これを用いて大相撲や日本相撲協会が経た「戦後」を相撲史の文脈のなかでとらえなおすことには一定の意義があるだろう。

そこで本論では、まず第一章で秀ノ山の著作物の概容を整理したうえで、彼の「書き手」としての特性について考察する。第二章では、日本の敗戦と自身の現役引退を同時に迎えた彼にとって「戦後」とはどのようなものなのか、秀ノ山の著作物を通して考える。第三章では、「相撲の専門家」として自身が書くべきものを見出したのちの秀ノ山の作品について、代表的な小説とエッセイを中心に整理し、初歩的な分析を試みる。

## 1章 年寄秀ノ山として「書く」

### (1) 戦後の文筆活動

笠置山が本業の傍ら相撲雑誌を中心に相撲評論やエッセイなどを寄稿するようになったのは、入幕直後の1935年、24歳のころである。とりわけ1940年代から45年にかけて大日本相撲協会の機関誌『相撲』や戦前のスポーツ雑誌『野球界』を中心に、『中央公論』『改造』など多くの誌面に寄稿した。『野球界』（博文館）は、早稲田大学の同窓である池田恒雄（のちのベースボール・マガジン社創立者）が1937年から編集長に就任したこともあり、座談会や対談などを含めると笠置山の誌面上の登場回数は群を抜いて多い。そのテーマや内容は単なる相撲解説にとどまらず、「大東亜戦争と相撲」「戦時体制下における相撲道」などと題する戦時期の政治状況に合わせた硬派な論説も目立つ<sup>4)</sup>。

笠置山は1945年11月に引退、年寄秀ノ山を襲名後、日本相撲協会臨時理事に就任、翌46年11月20日に母校早稲田大学大隈講堂で断髪式をおこなった。その後は巡業に同行する傍ら1947年から検査役にも選ばれ、土俵下での勝負審判を担当するようになる。1954年に理事に就任、主に理事長の補佐役として税務や渉外などを担当した。また日本教育テレビ（現在のテレビ朝日）の「大相撲ダイジェスト」では解説者を長く務めた。

年寄秀ノ山襲名後の彼の文筆活動は、雑誌掲載記事などを中心に少なくとも1946年から没年の1971年まで約25年間続いている<sup>5)</sup>。その内訳をみると、単行本が6冊（改訂版を含む）、雑誌掲載記事（座談・対談は除く）はおおよそ270本に及ぶ。主に後述する月刊雑誌『相撲』への寄稿が中心だが、それ以外にも幅広いジャンルの雑誌に小説やエッセイを書いた<sup>6)</sup>。エッセイのテーマは、相撲のほか、俳句、旅、健康など多岐にわたり、艶笑エッセイともいえるジャンルにもいくつか寄稿している。

戦後の秀ノ山の文筆活動の中心となったのは、戦前に引き続き日本相撲協会の機関誌『相撲』である。『相撲』は1945年1月以降休刊、その後季刊となり、1950年9月に一度最終号を刊行したが、1952年以降はベースボール・マガジン社がこれを引き継ぐ形で月刊誌『相撲』を刊行、代表的な相撲雑誌として現在に至っている。

秀ノ山は『相撲』におよそ200本以上を寄稿した。そのほとんどが後述する連載物だが、単発のエッセイや相撲評論などもある。連載エッセイは毎回4000字から6500字ほど、連載時は増刊号などの変則的な場合を除いて休筆は皆無で、きわめてコンスタントに執筆を継続していたことがわかる。

戦後、最初に現役時代の総括として寄稿したのが1946年7月刊行の『相撲』（11巻4-7号）「力士生活十四年」である。6000字ほどのこのエッセイは、すでに引退し秋に断髪式を控えた秀ノ山が、入門から現役時代を総括したもので、敗戦とともに自身の引退を迎えた一力士の記録として読むこともできる。

秀ノ山は1971年8月11日に胃がんのため死去した。1964年から『相撲』に連載中だったエッセイ「相撲一路」の執筆を8年近くにわたって続けたが、1971年9月・10月刊行の『相撲』（20巻11・12号）には、彼の訃報とともに遺稿（第93・94回）が、また翌月『相撲』（20巻13号）には「未完最終回」（第95回）が掲載された。管見の限りでは、この「相撲一路」第95回が絶筆である。

## （2）書き手としての個性

既述のように戦後の秀ノ山は日本相撲協会構成員でありながら、文筆家としての活動を活発に展開した。戦前から35年にわたって健筆をふるうことができたのは、彼が唯一無二の「インテリ力士」「相撲文化人」だったことであろうが、やはり秀ノ山の筆力によるところが大きい。ここで秀ノ山の「書き手」としての特性をみてみよう。

まず、すべての著作物に共通しているのが、それらが詳細な記録に基づいて書かれていることである。おそらく彼は、現役時代から日記やメモを書く習慣があり、場所中の星取表はもちろんのこと、日々の業務や私的な所用においても数字や人名、地名などを仔細に記録していたと考えられる。それらは相撲評論や相撲エッセイ執筆時に役立ち、特に晩年の雑誌『相撲』に長期連載したエッセイ「戦後回想録」と自伝小説「相撲一路」では、そうしたデータ管理能力がいかに発揮された。

これらの記録に基づくせいか、秀ノ山の文章はおしなべて論理的で無駄がない。その一方で、1930～40年代の戦時期に書かれた硬質な文体のものと比較すると、勝負の世界から退いた戦後の一連のエッセイでは、自作の俳句を披露するなど柔らかな筆の運びをみせる作品も増えた<sup>7)</sup>。子ども向け雑誌や業界誌、成人向け娯楽雑誌など、多くの媒体で戦後も長く執筆の機会に恵まれたのは、「元力士」という肩書きの物珍しさだけではなく、外連味のない簡明な文章を書けるという、彼の書き手としての優れた資質によるものだと考えられる。

彼の戦後の文章の一例として、少し長くなるが、1961年に寄稿したエッセイの一部を引用する。

人間は極端から極端に走る場合がある。勝負をする者は、その勝負の場合には闘志の塊であつても、その場から離れると、極端に静けさを求めるものらしい。それが、あるいは休養になるのかもしれない。私は闘志と勝利欲の連続から、自分の心の荒れるのを恐れて、好きな文学の一つとして俳句を選んだ。

### 風かおる両国橋や 勝角力

これは昭和十一、二年頃だったと思う。まだ部屋住みで、五月の夏場所中に、打ち出しとってから、隅田川畔にあった出羽海部屋から、柳橋の料亭に招かれていった際、両国橋の上を歩きながらできたものである。(中略)

最初、この句は、勝角力を枕にもってきて、両国橋や風かおる、としたのであつた。余りに、勝角力にとらわれていたのであつた。それから六月に旅に出て(中略)、私が泊まった宿の主人に頼まれて、色紙にこの句を書くと、主人はしばらく色紙を見詰めて、句を黙読していたが、これは風かおるを枕にした方がよいですね、閑取、といわれた。(中略)勝角力を初めにおいては句はばらばらになる。勝力士が肩をいからせて、これでもか、と道行く人に見てほしがっているようである。

風かおる両国橋、その橋を勝ってもおごらずに、独り心ゆたかにして、道行く人をよけて歩く勝ち力士のほうがよい。国技館で打ち出しの太鼓に、観客は今見てきた土俵を語っている人もあるだろうし、館内の昂奮した雰囲気をつまでも抱きつづけて、橋を渡っている人もあるだろう。そんな両国橋を渡る勝力士でありたい<sup>8)</sup>。

橋を渡る風景と俳句のエピソードから、剛腕な力士が一方で持ち合わせる静かな色香のようなものも感じられ、余韻の残る作品になっている。現役を引退してすでに月日を経た50歳のころの落ち着いた筆致である。

秀ノ山にとって「書く」という作業は苦痛をとまなうものではなく、勝負や業務に拘泥しがちな生活の気分転換をはかるものでもあつたようだ。小説は「巡業中の暇な時に書いたのは二つか三つ」だけで、多くは場所後のあわただしい時期に書くことが多かった。引退後は千秋楽後や番付編成会議の日など、むしろ業務に忙殺されるほど筆が進んだ<sup>9)</sup>。比較的時間に余裕がある地方巡業では、「ふと、創作の意欲にかられて、その後旅の宿の余暇に書き続け」ることもあつたという<sup>10)</sup>。「書くこと」は精神面のバランスを保つだけでなく、知的活動の核として彼の人生を支えたものでもあつた。

一方で秀ノ山は、協会幹部という視点から雑誌の座談会やインタビュー、自身のエッセイなどで日本相撲協会の運営や現状などにも言及した。戦前から協会のいわばスポークスマンとして協会の方針や活動内容を言語化し、社会に発信する立場にあつた彼は、戦後もふたたび協会が抱える課題を開示し、可能な範囲であえて議論していこうと考えていた。保守的で閉鎖

的な相撲協会という組織に所属しながら秀ノ山だけがそうした行動をとったのはなぜだろうか。次章で詳述する。

## 2章 「書くべきこと」とはなにか―敗戦直後

### (1) 力士としての「戦後」

既述のように、1945年11月に引退を発表した笠置山は、翌46年11月20日に母校早稲田大学の大隈講堂で断髪式をおこなった。これは当時の国技館が進駐軍に接收されていたという事情もあるが、笠置山本人のたつての希望で実現したものでもあった<sup>11)</sup>。

断髪後、髪を整えてもらったなじみの理髪店主とのやりとりを彼はこう記している。

髪を整え終わつた後でキング床の後藤氏がこの髷はどうしますか、と切りとられた髷を持つて言はれた。保存する気もないから、窓からばらばらにして捨てて下さつてもよいし、貴方が持つて帰つて下さつてもよい、と言つた<sup>12)</sup>。

断髪式に切った髷は、通常なら記念として本人が保管することも多い。「窓から捨ててもよい」などと断髪式直後に放言するのはきわめて奇異な態度である。彼はその心情についてこう書いている。

次への大きな理想実現に対する現実の世相を比べて、少しの隙も与えられないことを感じつつある此の頃としては、過去の思い出にひたつている余裕がないのであつた。行き過ぎかもしれないが、髪を其の場に振り捨てたい気持さえあつた。昔の人は切りとられた髷を、その型通りで箱に入れて保存されたと聞いている。その気持はよく解るけれども、それを振り捨てさせる何か大きな力に抑えられた気持であつた。(中略)

十四年間の丁髷とも別れた。土俵の華やかさの追想ともさらばである。敗戦日本の立ち上る様に自分も再び立つのである<sup>13)</sup>。

幕内上位で活躍したのだから、力士としては十分に成果を出したはずだが、ここでは自身の姿を「敗戦日本」と重ねて語り、切り落とした髷を「過去の思い出」として「振り捨てたい」という。

こうした心境は、笠置山が協会のスポークスマンとして展開した戦時期の言論活動と関係がある。彼が現役力士として活躍した時期は、1930年代後半から1940年代前半。当時、柔道、銃剣道、剣道などのような実戦に役立つ武道は「国防競技」として重視され、1942年には戦争翼賛団体「大日本武徳会」が発足した。これは、戦時体制下の武道の振興を目的としており、国家主義的な役割を果たす武道界の再編をめざすものでもあった。

一方相撲は、財団法人大日本相撲協会による「国技」としての大相撲が日本社会に浸透して

いたにもかかわらず、その娯楽性の高さから武徳会には種目としての加入を認められなかった。たとえ本質的には興行団体であろうとも、協会は「国技」を標榜する以上、政府や世論の期待に沿うべく報国的な活動を模索する必要がある。その際、武士道に通じる「相撲道」の精神性や国家ナショナリズムとの親和性を言語化し、世間に伝える役目を負ったのが、「インテリ力士」笠置山であった。

とはいえ、そもそも「国技相撲」とは何か、興行相撲における「相撲道」とは何か、「皇国に奉仕する大相撲」は何をするべきかという現実味に欠けた問いに答えを探すのは困難である。にもかかわらず、当時の笠置山は、そうした空疎な議論のなかで整合性を示すことを求められ、文化人との座談会や雑誌エッセイなどでひたすら役割を果たし続けた<sup>14)</sup>。

戦時期の大相撲は、1937年の日中戦争勃発以降、軍部の要請を受けて朝鮮半島や中国大陆への皇軍慰問をたびたび実施した。とりわけ1943年は大規模な「満洲場所」と華北地方の慰問という長期間の巡業となり、参加力士たちは激しく体力を消耗したという。

笠置山もこれに参加、後年、この苛酷な皇軍慰問が自身の引退を早めたと述べているが、同時に自身の信念とは裏腹の「言論執筆に迫られる様になった」ことも、気力体力減退の一因ととらえていた<sup>15)</sup>。上述のような虚しい言論活動を繰り返さねばならなかった境遇に対し、忸怩たる思いや後悔を持ちつづけたことは間違いないだろう。

敗戦直後、彼は戦時期の相撲の興隆を「真に相撲の良さ、体育的価値を認識しての普及ではなかった」「机上の、体験なき理論の上の相撲であつた」「真の相撲黄金時代は今後にある」<sup>16)</sup>と断じている。そうした心情を抱えたまま断髪式に臨んだ笠置山は、式の直後に次のような一句を詠んだ。

もとどりの 切られる窓に 落葉かな<sup>17)</sup>

鬚とともに戦前を「振り捨て」たからこそ、敗戦日本と同じように未来を見据えて「再び立ち上がる」ことができる。新たに年寄秀ノ山となった彼がおこなうべきことは、旧弊にしばられた封建的体質をもつ協会の「民主化」であった。

## (2) 協会員としての「戦後」

1946年、断髪式の数か月前に、秀ノ山は協会について次のように述べている。

日本の縮図でもあるやうな相撲協会も、ここに民主化しなければならぬ余儀なき時代になった。(中略)それは民族性の一つの表現でもある相撲が、国民とともに存続して来たからであつて、国民に変化なき限り相撲社会独自で如何なる変化も出来なかつたのである。

ここに国民は一大変化をする。この時、相撲社会も同時に変化しなければ捨て去られるに違ひない。と同時に相撲社会の正しき変化、正しき民主化に依つて一般国民をリードし

て行くことも考へねばならぬ<sup>18)</sup>。

敗戦後の混乱が続くこの時期に、「民主化」という新たな価値観を受け入れようとする秀ノ山にとって、自身が所属する大日本相撲協会の「正しき変化」は喫緊の課題であった。

とはいえ、相撲の「民主化」によって「一般国民をリードして行く」というこの論理は、戦前の彼の言説と同様に牽強附会である。当時の彼にとって、国民をリードするほどの相撲界の民主化とはいったいどんなことなのか、おそらくこの時点では明確に認識できていなかったのだろう。

しかし「敗戦の為に新らしく転換する日本をはつきりと見」て、「その転換について行かねばならぬ協会」にするべきであるという意思に迷いはなかった。さらに彼は「幾分遅れ気味ではあるが、その準備は出来てゐる。只指導者の問題だけが残されてゐるのである」と続ける。ここでいう「指導者」は相撲だけではなく「民主化」「近代化」を牽引する人材であり、秀ノ山自身の決意を表しているともいえる。

彼はなぜ協会の改革をこれほど強く志向したのだろうか。その背景には1932年の「春秋園事件」がある。これは、当時の現役力士「天龍」（本名・和久田三郎）らが不明朗な財政や茶屋制度、力士の不当な待遇などに関する改善要求書を協会に提出したことに端を発する事件である。出羽海一門を中心とした30余名の力士とともに品川大井町の中華料理店「春秋園」に立てこもった天龍は、協会との交渉を重ねたが決裂。32名の力士が協会に脱退届を出し、天龍らは翌33年に大阪で「関西角力協会」という団体を結成、協会とは別個の相撲興行を展開した。

1931年当時、笠置山は早稲田の相撲部に所属していたが、部内に指導者が不在だったことや、自身の体力の充実度などから、翌年の1月場所に合わせてプロ力士に転向したいと考えていた。しかし、正月明けに春秋園事件が勃発、彼の出羽海部屋入門は弱体化した協会の宣伝ではないかと一部メディアは報道したという<sup>20)</sup>。熟慮の末に入門を決意した21歳の笠置山にとって、こうした周囲の憶測や誤解は大変不本意であった。

1932年の春場所から笠置山は、彼の言葉を借りれば「専門力士」として国技館の土俵に立つこととなった。春秋園事件による混乱の渦中でプロの道を選んだ彼は、このとき天龍がめざした組織改革について、自らの立場を明確にする必要に迫られたのだろう。当時、天龍一派から行動を共にするよう勧誘された笠置山は、こう答えたという。

その主義主張には理解するところもあり意見を同じくするが、その方法と根本精神に合致しない点があるからとて、私は協会に踏みとどまつて自ら古い伝統の中に身を置いて時代的に改革する希望を持つから、そちらは新らしい、思ふままの地盤に於て、相撲道を破壊せぬ程度の改革をして下さい、と言つて別れたのであつた<sup>21)</sup>。

確かに笠置山は、天龍の改革案自体を頭ごなしに否定してはいない。その後満洲に渡った天龍が新たに「角道」と名付けた相撲の普及活動を展開した際も、一定の肯定的評価をしている<sup>22)</sup>。笠置山自身、実利や生き残り戦略ばかりを追う協会に対して常に従順だったわけではなかった。「国技相撲」の本質論を模索する一方で、「国技」普及の立ち遅れや指導者不足など、協会の抱える問題点にも雑誌の誌面でたびたび言及した。

こうした戦時期の言論活動について秀ノ山は、「一部では反感をもたれ、或ひは迷惑をかけたことと思つて済まない」という思いもあった。その一方で「協会の専門力士でありながら師匠、先輩等に嫌がられる内部の発表をして大衆の、愛好家の批判を希ひ、指導を念願して来た」<sup>23)</sup>とも述べている。

しかし結局、春秋園事件以後に協会内でみられた改革の気運が具体化することはなかった。1930年代半ばから40年代にかけて、双葉山をはじめとする人気力士が次々に登場、大相撲興行は空前の活況を呈したからである。当時について笠置山は「相撲界に稀な黄金時代に依つて早かるべきそれ等内部改革は反つて妨害となつた」<sup>24)</sup>と述べ、以下のように続ける。

観客も、唯、見る立場のみからの改革を叫んでくれたが、古い長い伝統の根本的改革には触れなかつた。それは無理もなかつた。知らないのであるし、知らそうとしなかつたのであつた<sup>25)</sup>。

戦時期の大相撲ブームは、横綱双葉山の連勝記録を日中戦争の拡大と重ね合わせた人々の熱狂が生んだものである。期せずして訪れた「黄金時代」は、大相撲改革の気運の芽を摘み、国民もまたそれに関心を払わなかつた。国民に相撲興行の旧弊にまみれた課題を世間に「知らそうとしなかつた」のは、協会関係者の責任でもある。それはスポークスマン役を担っていた自分も負うべきだと秀ノ山はとらえていた。こうした意識は、戦後の彼の言論活動に連続性をもって反映されているといえるだろう。観客に「知らそう」とする仕事が戦後の自分にも求められており、それは秀ノ山がその後の人生で向き合うべき課題になったのである。

### 3章 「書きたいこと」を見出す

#### (1) 時代を書く—小説と連載エッセイ

1946年の年寄襲名以降、秀ノ山はまず地方巡業の「先発」などを務め、翌47年からは検査役(勝負審判)に就任した。1949年からは東京の協会事務所に常勤し、主に税務・渉外業務を任された。忙しい日々のなかで、このころの彼は小説の執筆にも意欲をみせている。この時代に発表された相撲小説2編についてみてみよう。



### ①「愛の渡し込み」と「土俵に生きる」

「愛の渡し込み」は、1948年に執筆し、翌49年『サンデー毎日』「第37回大衆文芸」に入選した1万5000字ほどの短編小説である。

主人公はなかなか昇進できず苦しむ若手力士。しかし巡業先で出会った女性に魅かれ、彼女を心の支えにして稽古に専心、次第に頭角を現して夢を実現するという筋書きである。秀ノ山は九州の巡業先でこれを書き進め、推敲を重ねて48年12月に脱稿、翌年「力だめし」のつもりで応募した<sup>26)</sup>。

賞の授賞式の日、秀ノ山は旧知の仲である作家・尾崎士郎との対面を気にしていたという。それは大学の先輩でもある尾崎が「早くから新青年に創作を発表したり、相撲雑誌に随筆や紀行文を書いたりすることに反対していた」からだった。好角家として知られる尾崎は、笠置山が相撲に専念しないのではと危惧し、「特に小説を書くことはいけないと直言」<sup>27)</sup>したこともあったという。しかし秀ノ山は現役時代にも雑誌『新青年』をはじめとして何作か相撲小説を寄稿しており<sup>28)</sup>、必ずしも尾崎の意見に従ったわけではないようだ。

では、なぜ彼は相撲小説執筆にこだわったのだろうか。その理由をこう記している。

私は、現代の力士はその時代のセンスを持っている近代人であって、土俵の上でこそ、チョンマゲを結った時代的な外見をしているが、相撲技の探究においても、社会人としても、近代青年である、ということ表現したかったのでペンをとった<sup>29)</sup>。

秀ノ山が作品で描いた「近代青年」としての力士とは、おそらく自律的な生き方を獲得できる人物である。主人公は、自ら強い意志をもって大相撲の道を選んだが、相撲部屋の生活や日々の稽古を通して、その前近代的な非合理性に耐えがたい思いを抱いていた。

しかし、他の力士たちはそうした「因習」ともいえる日常に何ら疑問を持たずに生きている。彼らと打ち解けることができず孤独感に苛まれていた彼だったが、ある女性の助言を糧に精進を重ね、ついに三役に昇進、力士としての誇りと自信を獲得する。主人公が葛藤の末希望をつかみ取る姿に、秀ノ山自身が投影されていることはいうまでもないだろう。

一方、1950年に『ベースボール・マガジン』誌上に発表した短編小説「土俵に生きる」は、検査役として地方巡業に参加した新米の年寄が主人公である。いかにも秀ノ山を彷彿とさせる生真面目な彼は、行く先々の興行地で平然と八百長を依頼してくる勧進元や、それに唯々諾々と従う年寄や力士たちに強い不快感を抱いていた。腹に収めてやり過ごそうとしたものの、ある時ついに巡業先の取組中に怒りを爆発させてしまう。無気力相撲に物言いをつけ、土俵に上がって抗議する彼に罵声が飛び交い会場は大混乱、地元の乱暴者が彼に襲いかかるところで物語は終わる。

作品内で秀ノ山は、主人公に「相撲もスポーツであり、誰でもとるものであり、土俵から人間を創り出せる」<sup>30)</sup>と語らせている。ここでいう「スポーツ」とは、合理的なルール設定を前

提に誰もが公平な立場で参加できる近代的な競技を指すのだろう。

しかし、八百長を長年の慣習として受け入れている角界の状況は、およそ近代スポーツとはほど遠いものであった。「近代青年」としての主人公が、この世界で「個」を守り、自律的かつ合理的に生き続けることがいかに困難か。「愛の渡し込み」で描かれた現役力士の「希望」が、「土俵に生きる」では抗えない力によってつぶされる未来を予感させるのである。

## ②「戦後回想録」

一方、小説に登場する年寄とは異なり、このころの秀ノ山は実務の才能を発揮し協会幹部としての存在感を示すようになっていた。当時の協会の仮事務所は墨田区千歳町にあり、出羽海理事長（藤島秀光・元横綱常ノ花）のほか、理事の武蔵川（市川國一・元幕内出羽ノ花）、楯山（大野邦七郎・元関脇幡瀬川）など数名の職員がいるのみの小さい所帯で、秀ノ山は大きな戦力になったようだ<sup>31)</sup>。

1950年代前半の大相撲は、戦後の復興と歩調を合わせるように、次々と新たな事業を展開した。なかでも大阪と東京の本場所開催と並行して着工した蔵前国技館建設（1954年完工）はこの時代の一大事業である。翌1955年には戦後初めて昭和天皇が国技館を訪れ、協会悲願の「天覧相撲」も実現した。

1959年から61年にかけて雑誌『相撲』に連載した「戦後回想録」（全22回）は、終戦後から1950年代前半までの角界をめぐる出来事を中心に書かれたエッセイである。ほぼ時系列に協会内の情勢や新事業の展開を記しながら、秀ノ山自身のさまざまな業務や私生活のあれこれにもふれており、彼にとって「戦後」のひとつの総括ともいえる作品である。

1961年、最終回（第22回）の翌月に、秀ノ山は「書き残したことども」と題して「戦後回想録」の番外編を書いている。これによると、「回想録」を1954年の記録で終えたのは、蔵前国技館の建設が「新しい昭和相撲史の出発点となる」からである。実はできることなら50年代後半の一連の協会内改革について書きたかった。しかし、今書いてしまうと「迷惑のかかる人」もいるため「もうしばらく時間をおいた方がよい」と思ったという<sup>32)</sup>。

確かに、1950年代後半の協会をとりまく状況は、秀ノ山が書くのを躊躇するほど深刻であった。新国技館が落成し人気力士も登場した大相撲は、戦前と同様の活気を取り戻していたが、一方で財団法人として相撲の指導と普及などの公益性を優先させるべき協会が、興行団体の営利主義に走っている現状に批判の声が上がったからである。

1957年、衆議院予算委員会と文教委員会で、社会党の代議士が協会の財政面の問題点を指摘、とりわけ角界関係者が経営する相撲茶屋の不明朗な会計と、相撲指導者養成機関の未設置が焦点となった。文教委員会の公聴会に武蔵川が出席し、今後の改革案を提示したことで事態は沈静化したものの、世論の厳しい声を受けて、協会は抜本的な組織改革に着手せざるを得なくなった<sup>33)</sup>。

同年、出羽ノ海の後任として時津風（元・横綱双葉山）が理事長に就任、茶屋制度の廃止、

力士の月給制度の採用、相撲教習所の設置のほか、1年6場所制、行司や年寄の定年制なども導入した。1958年には財団法人日本相撲協会と改称、心機一転の再スタートを切るに至る。

「戦後回想録」で秀ノ山は、戦後約10年の「相撲史の出足」は「あまりにも悲惨」で、「相撲の伝統にも鋭い批判が加えられ」た、と率直に振り返っている。しかし、その後の一連の改革によって「種々の批判もあったが、国民の目が国技相撲に向けられたことは事実」<sup>34)</sup>であり、「この短い間によくも相撲が立ち直った」<sup>35)</sup>とも書く。協会中枢の当事者として常に渦中にあった秀ノ山は、新国技館の建設や制度改革とともに、「財政的確立と各人の近代的感覚」こそが協会運営に求められるものだったと後年述べている<sup>36)</sup>。

「戦後回想録」は、協会のそうした近代化の歩みを国民に「知らそう」とした秀ノ山のひとつの試みであったといえるだろう。

## (2) 相撲を書く―「楽雅記 四十八手」

1950年代から60年代にかけて、秀ノ山は雑誌『相撲』の誌面で頻繁に本場所総評や力士の分析、勝負予想などを書いた。1954年に理事に就任した秀ノ山の目に、好景気と人気力士に支えられて活気を取り戻した大相撲はとても頼もしく映ったに違いない。特に彼は栃錦、朝潮、若乃花などの「戦後力士」を高く評価した。この力士たちは「戦前の型にとらわれず、奔放な理知によって、土俵いっぱいにも暴れ回って」いるからだという。

大相撲は大正期までに「直線相撲」(押しや寄り、突っ張りなど)の型が定着、その後昭和の双葉山のような四つ相撲も人気を博した。戦後は体格の優劣を問わず、四つ相撲から土俵の円を使って「前後左右に丸く動く複雑な、それに速さが加わった相撲」「連続技の相撲」「合理的スピードのある相撲」<sup>37)</sup>をみせる力士も出てきた。こうした複雑化した相撲をとる戦後の力士たちこそ「近代的相撲の発端」<sup>38)</sup>であると彼は評価している。

新たな時代の到来とともに、秀ノ山は近代相撲に準じた決まり手の制定に力を注ぐようになる。彼は戦前、すでに『相撲範典』(野球界社、1942年)や『相撲』(旺文社、1943年)など一般向けの相撲指導書、解説書を刊行しており、かねてより相撲のルール化には強い意欲をもっていた。

1955年、秀ノ山は従来の協会制定の決まり手を四十八手から六十八手に「整理統一」、1960年に二手加えて七十手とした<sup>39)</sup>。これは上述のように、動きが速く変化に富む相撲が増え、従来の決まり手だけでは対応できず、曖昧な判断が増えたためである。

その際彼が念頭に置いたのは、「できるだけ現代語に書きかえて、わかりやすい極り手の名称としたい」ということだった。「その名称だけで説明がなくとも、すぐ、極り手がわかる」ようになれば世間の相撲への理解も進むからだ。その一方で「波離間投げ」(播磨投げ)のように「語源を調べることによって、その名称をつけられた時代にもどってその意味を知ると、実に捨てがたい」名称はそのまま残したという<sup>40)</sup>。

こうしたいわば「決まり手改革」を終えた秀ノ山は、雑誌『相撲』誌上に「楽雅記 四十八

手」(1962-1963年・全17回)を連載した。これは、毎回主な決まり手をいくつか取り上げ、江戸・明治期の関連史料などと照らし合わせながら解説するエッセイである。この連載の初回の冒頭は、以下のように始まる。

しゃしゃり出て独り相撲や夏近し  
本当に独り相撲に終わるかもしれない。

二、三年前から相撲の極り手を整理した折に気づいたことを、自分の考えだけで、自由に、囲炉埋をかこんで老人と語り合ったり、夏の宵に縁台に腰をかけ、お喋りするような気持ちで、至極のんびりと書き残しておきたいと思っていた<sup>41)</sup>。

当時、秀ノ山はすでに53歳。自作の一句で始まるこのエッセイは、決まり手の解説や故事来歴に時事的な話題や本場所情報なども混ぜ込みながら、どの回もすっきりとした構成に仕上がっている。「戦後回想録」と比べると一層おだやかな筆致で、相撲の専門家、文筆家としての彼の円熟を感じさせる。

こうした簡明な文章による「決まり手エッセイ」を書こうとしたのは、これまで彼が読み漁ってきた相撲解説書に「落胆させられた」からであろう。その多くは江戸期以降、行司やその時代の相撲研究家の手によるものばかりで、力士自身が書いたものはほとんどない。そのためどれも「説明不足」だという。

ではなぜ力士が解説を書かないのか。その原因のひとつは「力士自身にそれを説明する能力がなかった」からだと言<sup>42)</sup>。さらに大相撲は、江戸以降、「町人百姓の競技となり、大衆化されていながら、それを学問的に統一するものがなかった」<sup>43)</sup>ことも背景にあるという。

確かに、取組中の瞬間的な身体のバランスや動きを、明確に言語化するのは至難の業である。すでに1939年に『相撲四十八手』(野球界社)を刊行している秀ノ山は、現在の角界でそれができるのは自分のみであると認識していたのだろう。「楽雅記 四十八手」はさらにかみ砕いた表現と文体を用い、一般読者に受け入れられるような工夫もなされており、のびのびとした筆の運びからは、秀ノ山自身が楽しんで書いた様子もうかがえる。文筆家としての彼の真骨頂ともいえる作品である。

## おわりに―「相撲一路」

1960年代は大相撲にとって安定期ともいえる時代であった。連勝を続ける大鵬のほか、柏戸、栃ノ海、佐田の山、それに続く北の富士、玉の海など有力力士が土俵を沸かせ、高度成長期の追い風を受けて相撲人気は盤石のものとなった。

この時期に秀ノ山が『相撲』誌面で連載を開始したのが、自伝小説「相撲一路」(1964-

1971年・全95回）である。これは彼自身、つまり仲村勘治を主人公として、幼少期から勉学に勤しみつつも力士に憧れ、相撲の専門家をめざして自ら道を選び取っていく物語である。年月日や地名人名なども詳細に書かれており、早稲田大学からの角界入り、春秋園事件の内情なども描かれる。連載期間は約8年、多くの登場人物が入れ代わっていくさまは、あたかも大河小説のようだが、秀ノ山の死去により1937年の相撲界を書いたところで未完となった。亡くなる数か月前に、この連載は「近く終わる」「こんどは相撲界の裏面史を書く」<sup>44)</sup>と知人に話していることから、主人公が角界入りし、めきめきと頭角を現す1930年代までで完結するつもりだったのかもしれない。

戦時期の相撲協会は、「国技」としての存在感を喧伝するために「武士道」につながる「相撲道」を強調し、国家ナショナリズムに迎合する言説を繰り返したが、それらを実際に言語化しメディアを通じて発表する役割を担ったのは、若き笠置山であった。そうした空虚な言論活動と、戦地での皇軍慰問による気力体力の消耗が彼の引退を早めたことは間違いない。「相撲の専門家」をめざし自らの強い意志で角界入りを果たした彼にとって、こうした不本意な形での引退は、日本の敗戦と重なることでさらに苦い記憶として残っただろう。戦後の彼の著作には、1940年代の戦時期の角界や自身の経験に言及するものがほとんどみられない。これは本論2章で述べたような戦時期に関する忸怩たる思いが彼の胸中にあったということだろうか。

奇しくも日本の敗戦と自身の引退が重なった秀ノ山にとって、「戦後」とはまさに鬚を切るように過去を振り捨て、「一路」を新たに踏み出すための結節点であった。

1950年代後半の一連の改革を経たのちに、秀ノ山は「独り歩きの年」と題したエッセイで、協会について次のように書いている。

好角家、否、日本国民から国技としての相撲として育てて頂き、(中略)愛情と同情だけで持ちこたえてきた相撲協会であった。いつまでも子供らしく、少し、転んで泣き出すと、飴をなめさせられ、どろんこに汚れてくると、新らしい着物と着換えさせられてきたのであるが、昨今では、蔵前に新国技館建設に成功し、両国の旧国技館も譲渡できて、すでに大人らしく成長したのであるから、精神年齢は未だ未成年の域を出ないかもしれないが、ここらあたりで独り歩きをしてもよいのではあるまいか<sup>45)</sup>。

協会がようやく独り歩きできるまでに「成長」した。それは秀ノ山がめざした大相撲の近代化でもあり、戦後の秀ノ山の自己実現の道のりでもあった。

1968年に理事長に就任した武蔵川喜偉は、秀ノ山について「インテリジェンスを備えた者が年寄として残ったのは彼をもって先駆とし、世間からの相撲界理解に大いに力があった」<sup>46)</sup>と述べている。

実務に勤しむ傍ら、自分に可能な範囲で国民に「知らそう」とペンを持ちつづけた年寄秀ノ山の戦後は、ひとりの力士の記録にとどまらず、大相撲の今後のあり方を再考するための一助ともなるだろう。

## 【注】

- 1) 本論では笠置山勝一について、1945年11月の引退前は四股名の「笠置山」、引退後は年寄名の「秀ノ山」と表記する（「秀の山」とする資料もある）。また雑誌記事や小説の著者名では「秀の山勝一」「笠置勝一」と表記される場合もある。なお、文中では「協会」と表記しているが、現在の公益財団法人日本相撲協会の名称は1925年から1957年まで「財団法人大日本相撲協会」、1958年1月から2014年1月29日まで「財団法人日本相撲協会」である。
- 2) 赤澤史朗「戦時下の相撲界―笠置山とその時代」『立命館大学人文科学研究紀要』75号、2000年。
- 3) 胎中千鶴「笠置山勝一の相撲観 ―戦時期の「国技」をめぐる言説―」『目白大学人文学研究』第13号、2017年、および『叱られ、愛され、大相撲！―「国技」と「興行」の百年史』（講談社、2019年）。
- 4) 前掲胎中『叱られ、愛され、大相撲！』146-147頁。
- 5) 年寄秀ノ山としての文筆活動については、国会図書館の雑誌記事データベースをもとに整理した。
- 6) 秀ノ山が寄稿した主な雑誌はたとえば以下のようなものである。『旅』（新潮社）『放送文化』（日本放送出版協会）『少年クラブ』（講談社）『サンデー毎日』（毎日新聞社）『事務と経営』（日本経営協会）『週刊読売』（読売新聞社）『中学時代』（旺文社）『週刊サンケイ』（産経新聞社）『中学生の友』（小学館）『実験治療』（武田薬品）『経済展望』（経済展望社）『潮』（潮出版社）『オール大衆』（経済通信社）『笑の泉』（笑の泉社）『こども家の光』（家の光）『文藝春秋』（文藝春秋社）『6年の学習』（学習研究社）『大相撲』（読売新聞社）。
- 7) たとえば「随想 相撲歳時記」『相撲』1961年10巻7号～11巻5号（1961～1962年・全11回）などがある。
- 8) 秀の山勝一「相撲と俳句」『相撲』10巻4号、1961年、156-157頁。
- 9) 秀ノ山勝一「夏場所つれづれ草」『相撲』4巻11号、1955年、162頁。
- 10) 秀ノ山勝一「戦後回想録」（第9回）『相撲』9巻5号、1960年、170頁。
- 11) 「笠置山引退断髪式並に秀ノ山襲名披露」として挙行された。谷川徹三と相馬基の講演に続き、横綱土俵入りは安藝ノ海、太刀持ちは千代ノ山、露払いは五ツ海、行司は式守伊之助であった。（「力士生活の思ひ出（八）断髪前後」『野球界』37巻2号、1947年、45頁。）
- 12) 同上、47頁。
- 13) 同上、45-47頁。
- 14) たとえば1944年に文芸雑誌に寄稿したエッセイでは、「我々は現代の御世に生をうけてゐる。（中略）常に大日本国の臣民としての自己を中心に行動しなくてはならない」「私は日本精神、日本臣民道を相撲の上に持つて来やうとするのではない。相撲を日本精神、日本臣民に当嵌まるやうにしたいと念願してゐる」と書いている。（「決戦春場所を迎へて」『文藝日本』2月号、文藝日本社、1944年、31頁。）
- 15) 秀ノ山勝一「力士生活十四年」『相撲』11巻4-7号、1946年、17頁。
- 16) 同上。
- 17) 前掲「力士生活の思ひ出（八）断髪前後」、47頁。「戦後回想録」（第6回）（『相撲』9巻2号、1960年、169頁）では「もとどりの切られる窓や 落葉かな」に改められている。
- 18) 笠置山勝一「観たところ考へたこと」『相撲』11巻4-7号、1946年、30頁。
- 19) 「力士生活十四年」『相撲』11巻4-7号、1946年、17頁。
- 20) 同上、14頁。
- 21) 同上、15頁。
- 22) 前掲胎中『叱られ、愛され、大相撲！』、178-179頁。
- 23) 前掲「力士生活十四年」、17頁。
- 24) 同上。
- 25) 同上。

- 26) 「戦後回想録」(第10回)『相撲』9巻6号、1960年、162頁、および『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』1949年、63頁。
- 27) 「戦後回想録」(第11回)『相撲』9巻7号、1960年、176-177頁。
- 28) 前掲『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』63頁。
- 29) 前掲「戦後回想録」(第11回)、177頁。彼は『サンデー毎日』の受賞コメントでもこう述べている。「相撲は近代スポーツでなければならぬというので、その封建制を破るために角界を材料にこれからかいて見たい」「相撲社会が封建的だと言われているのを近代的になつてくれることのみを念じ、畑違いなペンをとつたまでである。」(「作者の言葉」『サンデー毎日別冊 春の大衆文芸』1949年、63頁。)
- 30) 笠置勝一「土俵に生きる」『ベースボール・マガジン』(第一次別冊)、ベースボール・マガジン社、1950年、55頁。「笠置勝一」はペンネーム。
- 31) 前掲「戦後回想録」(第11回)、176頁。この時期の大相撲復興については、出羽ノ海理事長の元で実務能力と指導力を発揮した武蔵川の功績が知られるが、楯山と秀ノ山が武蔵川を支えた部分も大きい。
- 32) 「戦後回想録」(「書き残したことども」)『相撲』10巻6号、1961年、172頁。
- 33) 公聴会の内容については、武蔵川喜偉『武蔵川回顧録』ベースボール・マガジン社、1974年、を参照。なお、1957年4月の公聴会の1か月後、出羽海理事長が国技館内で割腹自殺を図った。一命は取り留めたものの、理事長の親族が経営する茶屋の隠し所得の発覚を恐れたからだろうと噂された。(前掲胎中『叱られ、愛され、大相撲!』246頁。)
- 34) 前掲「戦後回想録」(「書き残したことども」)、172頁。
- 35) 同上、174頁。
- 36) 秀ノ山勝一「戦後十八年の歩み」『相撲』12巻11号、1963年、125頁。
- 37) 秀ノ山勝一「相撲技の移り変り」『相撲』7巻8号、1958年、215頁。
- 38) 前掲「戦後十八年の歩み」123頁。
- 39) 秀ノ山勝一「楽雅記 四十八手」(第2回)『相撲』11巻8号、1962年、182頁。
- 40) 同上。
- 41) 「楽雅記 四十八手」(第1回)『相撲』11巻7号、1962年、175頁。
- 42) 同上、177頁。
- 43) 同上。
- 44) 池田雅雄「秀の山親方を偲ぶ」『相撲』20巻11号、1971年、80頁。
- 45) 秀ノ山勝一「独り歩きの年」『相撲』8巻2号、1959年、94頁。
- 46) 武蔵川喜偉『武蔵川回顧録』ベースボール・マガジン社、1974年、306頁。

2023年10月13日